書　評

Phillip C. Almond

Mystical Experience and Religious Doctrine

— An investigation of the Study of Mysticism in World Religions —

Berlin, Mouton, 1982, (Religion and Reason 26)

X＋１９７PP.

深澤　英隆

宗教神秘主義研究の学問としての成立期を見てみると、出発点としての諸神秘主義の比較及び類型化、さらにその帰結としての神秘主義の本質論や進化論的系統化といった、宗教学一般の成立・展開過程に見出されるのと同様の諸契機を認めることができる。こうした諸契機が様様な個的・時代的背景に深く根差し、多くの問題を孕んでいることもまた、宗教学一般の学問史的反省が明らかにする所と全く平行している。しかし、神秘主義研究において特徴的なのは、こうした問題性が単に古典的諸著作に見られるのみならず、根本的反省が加えられることなく今日まで持ちこされて来たとの事実である。それは神秘主義一般を対象とした比較研究のみならず、専門化が進んで来た個別的研究においても同様であって、ひとたび文献学的分析を離れた論議が展開される時には、古典的な問題処理が踏襲されがちなのである。

こうした事の推移を見て来る時、７０年代より英語圏で散発的に始り、ここ数年間で次第に目立った一傾向となっている神秘主義研究の方法論的反省の作業は非常に注目に価するものである(1)。ここでの諸論者の主たる関心主題としては、次のようなものを列挙することができる。１）後続の諸研究の基礎となった古典的研究（ジェイムズ、アンダーヒル、オットー、ステイスらの）の批判的検討。２）古典的研究の中心問題でありながら、十分な認識論的基礎の上に解明されることのなかった神秘経験の再分析。この場合特に神秘経験と解釈との関連が中心的論題となっている。３）神秘主義（経験）成立における外在的諸要因（教義、文化、社会など）への着目。これは特に２）の問題との関連の下になされる。さらに宗教哲学上の論題として、４）神秘家・神秘思想の様々な言明・命題の認識（知識）論的位置づけ、真偽論的分析。本稿でとりあげるP.C.Almondの著作もここ十年ほどのこうした論議の延長上に成立したものである。アーマンドの同書は、短い論文を中心に行われて来た議論を一著としてある程度包括的に扱ったこと、また J.Waardenburgの監修になる mouton 社の宗教学方法論のシリーズ、Religion and Reason の最新刊として昨年（８２年）末に出版されたことなどからして、特に取り上げる価値があると思われる。著者はクィーンズランド大学（在豪州）の哲学科教官である。

本書における著者の主題は大きく二者に分けられる。第１部（第１～第６章）では、ラーダークリシュナンからN．スマートに至る神秘主義研究の批判的検討が行われるが、その際の著者の基本的テーゼは以下のようなものである。１９世紀後半以後諸宗教が同一平面で視野におかれるようになって以来、諸宗教の真理性を巡る問題が生じた。つまり様々な宗教の教義が各々自己の真理性を主張する中で、諸宗教は同一の真理を表すか、あるいは真なる宗教・偽なる宗教があるのか、さらにそれを定める基準は何なのかといった哲学的・実践的問題が生じた。アーマンドによれば従来の一般論的神秘主義研究の背景には常にこうした問題意識があった。そしてそれと同時に宗教（的真理）の決定的生成契機として神秘経験が主題化され、かくして神秘主義（経験）の記述・分類を通じて諸宗教の教義的葛藤を解決する試みが様々な形で為されることになったというのである。第一部で著者は、英語圏の代表的研究者（Ｓ・ラーダークリシュナン、Ｒ・Ｃ・ゼナー、Ｎ・スマート、Ｗ・スティス）及びＲ・オットーの所説を検討し、このような背後的要因を探ると同時に、もっぱらロジカルな推論により各論者の矛盾点・不整合を指摘している。多岐に渉る論述内容についてはここでは省略せねばならない。アーマンドの分析は概ね精緻なものであるが、ただ第５章で扱われるオットーに関しては問題が残る。元来が両義的で多面的なオットーの概念構成を限られた紙幅で扱うのには無理があり、著者の論述も多くの点を見逃している。例えば『東西神秘主義』（１９２６）でオットーは諸神秘主義の統一性と差異性に関して非常に微妙な論議を展開しているのであるが、著者は主としてオットーのヌミノーゼ経験の分析に基づき、オットーをもっぱら諸神秘主義の統一論者として描いている（特に１１３頁など）。もっともオットーのそうした立場の背景に、ド・フリースの線にそって発展せしめられたカント的発想を見る著者の論議は興味深い（１１４頁以下）。

第２部「神秘主義研究のための概念枠にむけて」では第１部の内容を形式的に整理しつつ、今後の研究の概念的枠組を提示する試みがなされる。第１部では、同じ神秘主義という現象を対象としながら、諸研究者が全く相異なる結論を導き出していることが明らかにされたが、第７章「神秘経験と解釈―― 可能な諸モデルの分析」では、「これらの、また他の、神秘経験についての説明が、神秘経験とその解釈との関係についての相異なる方法論的仮定に基づく」（１２７頁）ことを明示する試みがな

される。一般に神秘主義は神秘経験と神秘思想から成るとされるが、神秘思想自体の言明に従うならば、第一に自己証明的な神秘経験があり、それに対し後続的に何らかの解釈が加えられる（または既存の教義的解釈が再確認される）ことになる。しかし時に研究者によっても踏襲されるこうした直線的二分法はそのまま受けいれうるのか、むしろ経験に対し解釈的契機が先行的に働きかけるのではないのかとの考え方も成り立つ。経験と解釈との関連に注目するアーマンドのこの発想自体は先述の英語圏の趨勢に依拠したものであるが、ここで彼は、両者の関連の見方を５つのモデルに分ち、整然と論じている。これらのモデルはほぼ論理的可能性を尽したものと言える。著者も言うように神秘主義理解は陰に陽にこれらのモデルのいずれかを含意するのであるが、他方でこうした明晰な問題処理と自己の理論構造の反省は神秘主義を論ずる者にとって忌避されがちなものである。

批判の対象となっている４モデルを列挙するならば以下のようになる。１）神秘主義的諸言説の一致が全ての神秘経験の一致を証示するとの立場（ジェイムズなど）。２）神秘経験は一つだが神秘家によりそれに加えられる解釈は伝統依存的であり、ヴァリエーションをもつとの立場（ラーダークリシュナン、スマート、ステイス、オットーなど）。３）諸伝統を通じていくつかの少数の基本的な経験類型が存在するとの立場（ゼナーなど）。４)神秘経験のパラダイム的言表（著者の定義によれば、神秘経験の中心的焦点、目的、性質に明確に言及した言表）と同数の異なった経験類型が存在するとの立場。個々のモデルにつき著者は細かく批判点をあげているが、書評者の観点からごく概括的にまとめるなら特に次の二点があげられる。第一に、いずれの立場も、神秘文献の文言を文字通りの経験記述と受けとめるか、あるいは少くともそこから当該の神秘経験の現象性格を読み取りうることを前提としているが、これはナイーヴな立場と見なされねばならない。第二にいずれのモデルも神秘経験を何か起始的な、超文化的なものと見、それに後続する解釈過程と二分的に考えているが、これは人間経験一般の先行的決定構造に比して神秘経験を全く超経験的なものとして措定するものである。

第８章「神秘経験の多様性―― 哲学的序説」では著者自身の立場として、既述の諸モデルの困難を克服するモデル５、すなわち神秘経験への教義・文化・社会などの先行解釈の影響・内在を考慮するモデルが検討される。このモデルそのものの重要性は言うまでもないが、しかし本章での論議には英語圏でこれまで論ぜられてきたこと以上の展開は見出せない。ただ最近は一方的に神秘経験の前決定性が強調されていたのに比して、アーマンドは先行解釈を超える神秘経験の伝統更新の可能性を指摘しており（１６８頁）、また反射的解釈（reflexive interpretation）との概念の導入により、前述モデル２の理論的可能性を立ち入って論じている点が目立っている（１７２頁以下）。

第９章「結論」では論点の整理とともに、出発点に戻って諸宗教間の葛藤の問題が再論される。アーマンドは神秘経験に諸教義間の葛藤の解消と真理性判断の基準を求めた古典的論者の試みを否定し、教義の真偽は経験外的な基準により決定されるしかないとする（１８４頁以下）。これは経験への教義の内在を認めるモデル５の立場からすれば当然の帰結であろう。

以上、紙幅の制限もあり全く概括的な紹介たらざるを得なかったが、最後に本書の得失をまとめておきたい。第一に問題となるのは、神秘主義研究書としての本書の位置である。著者はしばしば本書が「経験的」(empirical)な研究ではなく、その準備作業であると強調する（７、１２７頁など）。この場合著者の考える「経験的」研究、またそれ以前の研究とはいかなるものであるかは、必らずしも明白ではない。著者の意図を察するならば、本書は神秘主義研究の研究というメタ・レヴェルでの哲学的作業を目指したものということになろうが、一方著者は本書のそこここで、より積極的に神秘主義（経験）自体の性質に関し事実的推断を下している。しかもそこでの論証は全く不十分なものである（例えば第１部各章での「万有在神論的経験」や「有神論的経験」をめぐる論議を参照）。いずれにせよ著者はこうした基礎的な点をより明確にしておくべきであった。

第二に、すでに見たように本書は英米で為されてきた論議の延長上に成立したものであるが、問題をよく整理して示した点は評価しうるものの、本質的に新たな観点をつけ加えたとは言えない。方法論・原理論上の形式的論議はほぼ可能性を尽したと見るべきであり、結局のところ今後必要とされるのは、具体的な事例に則しての、ないし何らかの「経験的な」研究であろう。

第三に、これは英語圏での論議全般について言えることであるが、他国語圏の研究がほとんど全く参照されず自足的なままに止まっている点が指摘できる。もちろん学問史の回顧といった場面で方法的に設けられた限定である限りは異議を唱えるまでもないのであるが(2)（本書の第１部についてはこれがあてはまる）、例えば経験と解釈といった問題を論ずる時に独仏における解釈学的哲学の成果が参照されないことなどは、大きな損失というべきである。

他方で、本書を含み、経験と解釈を中心としたこれらの論議は、その明晰さや統御された推論の行使において、神秘主義研究に新たな方向づけを与えるものと思われる。とりわけ神秘経験への先行解釈の内在を視野に置く、解

釈学的モデルの提起は、いまだかなり図式的なものではあるが、他の人間諸学の成果をも通じてより具体的な内実を与えてゆくべき重要な提題である。いずれにせよ、神秘主義研究が時に不十分な理論構成に満足し、時に放恣に流れるのも結局のところ、神秘経験という実証的方法の限界外にあるものをなお自己の立論の決定的モメントとせざるをえないという宿命を、神秘主義研究が背負っているからなのである。

(1) この流れの中にあるものでまとまった論文集、著作となっているものとしては、S.T.Katz (ed.), *Mysticism and Philosophical Analysis*, London, Sheldon Press, 1978. W. J. Wainwright, *Mysticism* London, Harvester Pr., 1981. R. Woods (ed.), *Understanding Mysticism*, London, The Athlone Pr., 1981. があげられる。

(2) 因みにこの点で我が国の神秘主義研究史に目を向けることも興味深い結果をもたらすであろう。例えば岸本英夫は『宗教神秘主義』(１９５８)の中で、神秘体験と神秘思想の二分法を採用し、前者を研究の重要な契機として理論中に組み込んでいるが、本書評で見たモデル２の典型的ケースとなっている。他方今日ではあまり顧みられないが、諸井慶徳の大著『宗教神秘主義発生の研究』(１９６６)はイスラム及びパウロの神秘主義の具体的資料を駆使して、本論のモデル５を先取りしており、注目すべき業績であると言うことができる。